愛馬心に欠けてゐた
自分を恥ぢつゝ

騎六

輜重兵一等兵　高橋治一郎

南京へと急追撃をつゞけ　陥落迄無事に任務を果した私の愛馬高号は　無湖警備中の二月二十一日過勞のため病氣になり病馬廠に入廠しなければならぬ様になりました

此の時迄余り愛馬心のなかつた私は驚き且心配しましたが後の祭です　もう馬は歩く事さへ困難になつてゐました

私は高号と共にある部落に馬の休養をとつてゐましたが　部隊は近日中に討伐に出発すると聞き　出征當時父から

「一歩も他の者に引かれるな」と言はれた言葉を思ひ出して慚愧の念で胸がしめつけられる様でした

瘠せ衰へた高号は日頃余り大事にも取扱はなかつた私の足音を聞きつけては　弱々しい聲で嘶いて鼻をすり寄せて來ました　私はたまらなくなつて愛撫するのが常でした

心の中では自分の不注意を詫び　必ず療してみせると誓つて一生懸命に手當を施しました

併し馬はだん〳〵弱つて行くばかりです

もうこうなつては駄目だらう等と弱い氣持が湧いて來る度に故里から來る手紙に必ず書いてある文句を思出しては　一層の努力をつゞけました

「お前は馬が一番だ　馬を大切にせよ」

とこの言葉は私のともすれば弱くなる氣持を奮起せしめるに充分でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

私のこの氣持と努力が報ひられてかだん〳〵快方に向ひ四月二十二日部隊が帰へる時は立派な健康馬になってゐました

私はこの事から常日頃の愛馬心の必要を強く感じました

高号は現在も大元氣に任務についてゐます

が新兵殿に申送りせねばならぬ様になり〳〵も大切にしてもらふ様にたのみ毎日元氣な様に祈ってゐます

廣德附近の討伐

始めて遊擊隊 土民軍と戰ふ

騎六八二

騎兵大尉　津田春吉

昭和十三年三月十四日　當中隊は歩兵第三十六旅團長隷下に配屬を命ぜられ討伐隊となり廣德附近の掃蕩に行きました事

支那事變發生以來　討伐遊擊隊と土民軍といふ名稱は此の時始めてでした

三月十五日より當國一廣德間の討伐掃蕩は開始されましたが　其の間當中隊は主として前衛騎兵として行動したのです

今迄の作戰間に於ては　火兵及斥候等の始く部隊の前方に在るものが　割合敵發見及射擊を受ける率が多かったのですが　此の度は部隊の後尾　特に落鉄や疾病のため後方に一時停止し　或は殘置されるものが敵の包囲を受け又は射擊を受けるといい具合で　敵狀發見等は主として後尾のものゝ任務で　後方警戒に重点を置かねばならぬ狀態でした

其の反面に幹部以下疾病或は落鉄予防・給蹄予防には一段と注意を喚起する様に

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

つた事は、此の敵に對して感謝の意を表し
て良い訳です
三月十八日普師渡といふ部落附近に於て
例の如く中隊の後尾の輕機駄馬に向つて敵
は不意に射撃をやつて來ました　こゝは水
田の中の全くの隘路で　水田は膝を沒する
有様　その中を反転攻撃しました
本行動間中隊は前方側方概ね三・四粁の間は
各要衝々々くまなく捜索しつゝ前進しま
したが　中隊通過後歩兵部隊等は相當大な
る兵力を有する敵と戦斗をやつた如く　又
警節渡（密田國東方十二粁）に露営した場合は
二三・〇〇、〇二・〇〇、〇五・〇〇の三回に
亘つて夜襲をやつて來た　その夜襲たるや
露営して居る部落の周囲の土民を以て終夜
ワイ〳〵　喧噪せしめて殆んど我等を
疲労せしめて全く休養を困難ならしめて後
三回も夜襲して來たのです　此の時始めて
一同は
「パイ」遊撃隊とはこんなものか
と憤慨を聞いたことでした
三月二十一日は此の遊撃隊と土民軍（竹槍
隊）二〇〇に斥候が全く包囲されて苦戦し
てゐるのに應援したものでした
三月二十三日は梅緒鎮（廣德北方二〇粁）
南側に於ては　土民軍白襷隊（黒服に白襷
を十字にかけたもの）の竹槍隊と交戦しま
したが　全く明治維新時代の戦爭を想出さ
せるものがありました

愛馬と共に泥濘の討匪行

騎六ノ二
騎兵上等兵　地蔵堂武義

南京も既に陥ち　我騎兵部隊は某地に警

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

備につき人馬の休養をとり　次期作戦に備へてゐました

廣德附近に蟠居する殘敵掃討の命が下つたのは江南の野に春風吹き初めた三月十五日でした

今、這吹雪に閉ざされてゐた廣野は何時しか青い草の芽が萌え出で　柳の芽もふくらんでゐます　頬を左ぶる快い風に吹かれ乍ら勇躍征途につきました

ご、數十日の休養に人も馬もはち切れさうな元氣です

南京は占領されたけれども　附近の山嶽に逃げ込んだ敵は友軍の潰滅を見てはゲリラ戰を繰返してゐました

行けど〳〵　雨と泥濘の行軍　橋と名のつくものは全て破壞し去つて討伐隊の進撃を阻止せんとしてゐます　數日續いた雨に道路はまるで泥田の様です　ともすれば倒れんとする馬を勵まし乍ら進撃しますが　馬は雨と濕る汗にぐつしより濡れ如何にも苦しさうです

無理とは知り乍ら指車を入れる氣持は自分達の様に馬を活兵器とする兵隊でなければわからないかも知れません

大休止の命が出れば　疲れも忘れ水を求め飼付を終り　始めて飯をかき込む様にして食ひ慶東を以て馬の御を擦つてやつてゐると　一時間位　大休止はすぐ過ぎてしまう出發です　又してもの南京追撃戰の如き難行軍を續けました

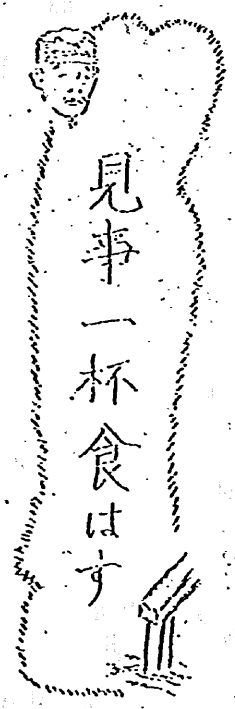
今度の敵は直接本隊に遭遇することなく尖兵や後方警戒隊又は斥候等の如き小部隊を襲撃する様な戰法をとりました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一夜中寒さにふるへて

騎六ノ二
騎兵上等兵　伊知地米憲

私の故郷は年中相當に暑い南國です
三月十八日四角地帶の戰斗に參加しましたが　寒風は身を切る様　それに加へて霖雨類を打ち骨を刺す様に冷い　敵前なるが故に焚火は禁ぜられ　夜に入って愚の手網を握って煙瓦の上に横になりましたが勿論藁も何もありません
歯をがチヤ〳〵　言はせて　とう〳〵一晩一睡もしませんでした



見事一杯食はす

騎六ノ二
騎兵一等兵　西村正雄

昭和十三年三月　廣德附近四角地帶の戰鬪の時であります
警節渡に中隊は露營してゐたのですが
周囲に散在して居た敵が〇一〇〇頃第一分哨前に急襲して來ました　分哨では時前に敵襲を予想して前面の橋を落して置きました
ところが敵はそれとは知らず段々近づいて來る　その中の一人は勇敢にも駆足で橋を渡ろうとしましたが　ドッコイ橋がありません　川の中に眞逆様に墜落　アプ〳〵言って居りましたが　遂に水の中に沈んでしまひました　見事一杯食はしました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

運瀆鎮の敵襲

師團通信隊
歩兵上等兵　坂本　幸

久しく蕪湖に在り　英氣を養つてゐた國本部隊の一部は　江北戦線に参加すべく行動を起し　揚子江北岸に上陸運瀆河に沿つて前進しました

其の肥後隊と有線連絡を保つべき任務を受け　我が鶏飼隊は五月十九日蕪湖(谷蕪湖船)に分乗して蕪湖を出発　翌日は揚子江岸から四十粁の運瀆鎮を占領　部隊と有線連絡を確保することが出来ました

二十一日は設営と明日からの前進準備で多忙でした

春光漸く老ひた運瀆鎮周辺は極めて平穏で土民も日章旗の庇護の下に安心して農耕に従事してゐるやうに見えました

二十二日大隊主力は巢湖方面に出発　小隊主力も次いで前進しました

私は残念にも夜半から発熱して残留になりました　その夜は一点の曇りなく　生暖い風そよぐ夜空には無数の星がまたゝき　残月が運瀆河の水面に光を投げてゐました

蚊軍と発熱にあまられず　淋しい夜でありました

突如けたゝましい　ケンコの唸り

さあ敵襲

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

全員武装を整へ　浜田曹長殿の指揮を受け
それ〳〵抵抗線につきました
當時警備隊は二個小隊　しかもその人員は
僅かな数です　敵は相當な部隊で迫撃砲
チヨコ機銃の音は　豆を煎る様に響き渡り
時を重ねて彼我の銃声は益々熾烈となる
小隊にも敵は運搬河の渡河準備さへして
ある様でした
豆腐屋のやうなラッパの音に　支那兵らし
く騒ぎ立つ敵も近くにして　私達はよく指
揮者の意を受け掃蕩を待ちました
戎き寡兵と知る敵は　掃蕩に至り尚執拗
に襲来して　対岸一帯に陣地構築を始めま
した
五時頃小隊主力とも連絡が出来　小隊主力
の帰りを待つより外他に方法はありません
でした

二十三日は対岸に在つて交戦　午後三時を
期して愈々渡河攻撃を開始しました
待ちに待つた小隊主力も到着し　私達の意
気は愈々旺んです　重機関銃　擲弾筒の
の援護射撃のもとに渡河に成功　敵陣の
一角を占領することが出来ました
敵は国章狼狽し　接戦二時間余で算を乱
して潰走し始めました
私達は追撃に移りました　敵の死体は点
々と横たはり　河畔一帯の家屋は戦火に包
まれ　そゝり煙は初夏の夕空を直衝に染め
ました
午後六時頃　私達は子河口小銃　青龍刀
其の他を鹵獲して宿舎に帰りました
部隊長殿以下満悦の体　私達も感無量で
昨夜来の激戦がまるで短い夢のやうでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

運漕鎮回顧

師團通信隊

歩兵上等兵　福永順喜

運漕鎮は蕪湖をはなれること約六十粁安徽の中原を流れる運漕河畔の一小街であります

我が小隊は某部隊との有線連絡の命を受け発動船で出発　河面に浮ぶ水鳥群を驚かし　河上の小波を蹴って驀進しました

途中数ケ所の障碍柵が設けてあり　我が軍の遡航を阻止せられ　是を排除しつゝ前進　三坊に一泊し翌日十五時運漕鎮に到着し

て　爾後の作業の準備をしました

数日経て〇〇の攻撃が開始せられて　小隊は部隊の攻撃前進に伴ひ　電話網の構成しつゝ前進しました　使用線二十四巻　二三三十分目的地に着き　同地に露営しました

翌朝となれば運漕鎮（残留者宿舎）から「運漕鎮は昨夜来敵襲を受け交戦中だから至急帰隊する様」

隊長殿の電話あり　小隊は直ちに帰途につきました

運漕鎮近くなるに従ひ銃声が盛んになり敵弾は異様な唸りを生じて身辺を掠め事態の猶豫ならざるを察知すると共に　留守隊（運漕鎮）の安否を憂慮し宿舎に急ぎました

十六時宿舎につき　留守してゐた戦友一同

0800

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

の無事な姿を見て安心しました

敵は約七十米の河を挟み対峙中であり、私達は直ちに渡河準備にかゝり、擲弾筒重機の援護下に渡河を決行、乗船の際戦友が一名負傷しましたが、其の他は全員無事で敵陣の一角を占領しました。

衆を恃む敵は却って頑強に抵抗したが、決死の我が軍には抗し兼ね、激戦二時間余にして多数の遺棄死体を残してなだれをうって逃走しました

対岸の敵陣地には敵影なく、日暮れを利用してチェッコ小銃其の他多数の分捕品を得て一同無事帰還しました。隊長殿も大喜びで祝杯をあげました

顔知らぬ人の便りもなつかしや
いくさの場に遠くある身は

いつしかに思ひいでけり夕空に
慰問の宝を遠くはるけく

かりそめの病に伏せるつわもの、
わが身を恨みぬくにの便りに

―せいてん―

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

初空襲にとんだ間違の歩哨	Ⅲ／一四 歩兵軍曹	田勝義
歩哨線を通る女	Ⅰ／二 歩兵伍長	廣瀬五郎
忙しい警備	Ⅰ／二 歩兵上等兵	紀玉新一
自慢の料理が大変な失敗	Ⅱ／一四 歩兵上等兵	二宮宗造
通信筒と信爆弾	兵本	首藤軍曹
大行李長の最後	兵本	後藤上等兵
夜盗四十名一網打盡	Ⅱ／八 歩兵上等兵	牧 満
御座間曹長の散華	Ⅲ／一〇 歩兵軍曹	井吉稲巳
豪勝肉彈突撃作候	Ⅰ	第二中隊
慰問袋	Ⅰ／二 歩兵上等兵	竹本 満
青松葉の薪	Ⅱ／六 歩兵軍曹	仲村渠豊
戰屋洗ハクリークの魚取り	Ⅱ／本輜 伍長	大石夫郎
感心な姑娘	Ⅰ／本輜	佐藤上等兵
雪の夜	Ⅰ／二 歩兵上等兵	後藤孝義

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南國警備 初空襲に とんだ間違ひ

歩四七 II/M6
歩兵軍曹 長田勝義

南京が陥ちて間もない十二月二十一日 聯隊は蕪湖に向って出発しました
蕪湖は揚子江岸の開港場で水陸の便よく支那の町にしては小綺麗な所でした
今にして思へば 渡支以来一番印象に深い想ひ出の地です
其処の警備も一週間足らずで 大晦日も明後日といふ二十九日 暁の大雪を踏んで 他部隊の餅つきの音を聞きながら 南國指して出発 行軍二日にして到着しました

始めて迎へる戦線の元日も三日前の喜びとおつて変り 私共は豚同様に藁の中に潜り沈んで寒さに震へながら明しました
単調な山の警備に それでも張り切って服してゐた或る日のことでした
初めての空襲を受けました 私は丁度対空射撃部隊の一人として服務してゐましたが
今迄敵機を見たこともなく 又眼鏡片手に見ても 高度が餘りに高いので はっきりしませんから 頭上に来てもさほど気にも止めませんでした
其のうち私共の上空を少し過ぎた頃 左へ旋回したかと思ふと 何か黒い物を二三ツ落すのが見えました
敵機だ
誰かが叫ぶのも半信半疑でゐますと 不意にドガン〈と地軸を揺すやうな物凄い音響がしました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「それッ 敵だ」といふ訳で一斉に小銃機関銃の射撃が開始されました 敵機は悠々と旋回してゐます 分隊の命に依り 私は射撃を交代して 弾薬補充の為に宿舎に帰りました 残つてゐた小隊の者に向つて「弾薬々々」と大声で連呼しつゝ走りました ところが 今迄宿舎附近に出て居た兵が 急に慌てて皆家の中に駆け込んでしまひます 頬に障つた私は 部屋の中に走りこんでみますと 皆は白い布や黒い布を以て口を塞ぎ 押へた手からはポタリ〳〵と水滴が落ちて居るではありませんか

「何をしてゐるのか 弾薬々々」

と再び怒鳴りました すると一同点点で只顔を見合せてゐるばかりです

「お前のその態は何かッ」

と言ひますと 漸く口から手を離して

「何んぢや かスぢゃないのか」と言ふのです

「誰かガスと言つた？」と問へば

「上の方で誰かゞ叫んだ」とのこと 餘りの腹立しさに「馬鹿ッ」と言ふなり 弾薬をひつたくるやうにして 元の位置に駆戻りました

間もなくして 敵機も去り 一同が集つてから さつきのことを訊いて見ますと 私が「弾薬々々」と叫んだりを 小隊では「ガス〳〵」と聞き違へた兵隊が有合せの戦帽やタオルを 其の附近の手洗水に浸し 口と鼻を覆つたのだと言ふのです 其の慌てかたに皆はどつと大笑ひしました

穿国 歩哨線を通る 女

歩四七 1ノ二

歩兵伍長 廣瀬五郎

此處は蕪湖を南へ二十三里 山間の孤城宣国です 此の町には藤分石の大軍が屯してゐたのですが 空陸一体の皇軍の進撃に 敵は脆くも敗退したのです

城内の住民は食料は申す迄もなく家財道具迄

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

く支那軍のために劫奪され男は皆襲撃隊に連
行され夜陸使されたといふことでした
此の様な國の民さえ全く可哀想でなりません
私達が此の町に駐屯してから一ヶ月ばかり経つてから
のことであります
淡い月光に打壊された家や土壁が無気味な影
を投げてゐる静かな或る夜　立哨中の私の前を
ちらと掠めた人影がありました　すかさず銃を
構へて怒鳴りました　人影は驚いて立竦んで
逃げる様子もありません　近寄つて見ると女で
す　しまつたといふ様な顔をして振り向いて居
ます
「一体何しに来たのだ」
私は下手な支那語で訊問しました
「食物を取りに来ました」
と言ふ手には　何か持つてゐます　女は今に
も泣出しさうな声で、更に続けるのでした
「今迄十何日も食ひません　自分は幸抱もし
ますが子供が可哀想です、飢と寒さに
泣く我が子を見兼ねて、恐しさも忘れて
来ました」
聞いて居た私は胸元に突付けた銃剣の鋒
先が次第に下るのを感じました
「心配することはない　殺しはしない
日本軍は決して無辜の民は苦しめない
が　夜遅く来てはいけない　直閣村の
者と一緒に白旗を立てて来い」
と知つてゐる丈の支那語を総動員して繰
り返し〳〵熱心に話しましたが　私の真意
が通じないのか　或は日本軍を信じかねたの
か女は無表情な顔で　でも少しは安心したら
しく　とぼ〳〵と帰つて行きました

歩四七　一〇
歩兵軍曹　井之口福巳

銃前哨

凝と見上げる豚の面

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

湾沚鎮 忙しい警備

歩四七・二・二
歩兵上等兵　紀玉新一

蕪湖でお正月を迎へるものと樂しんで揚子江の黄色い流れで餅米も洗ひ沢山の餅を搗きましたが　突然甯國へ出発との命令で　十二月二十九日蕪湖を出発しました

雪のチラ〳〵降る日でした　行軍中の晝食の時は餅を焼いて食ひ〳〵行軍しました

甯國も近い頃門松用の松枝も用意して夕方には無事到着しました

そして戰地での第一回の正月も感激の中に迎へ　二十日程して　大隊主力の居る湾沚鎮に引返すことになりました

此の湾沚鎮警備の一ヶ月間は　下士哨に討伐に　日の暮るやうな忙しい警備勤務でした　又敵襲も度々ありました

或る時は私達第三分隊の食堂の天井に　迫撃砲弾が飛来し　大きな穴を開けました

敵の銃声のしない日とてはありませんでした

然し休養日には見つけた網で魚取りに行つてはは　血の滲む警備の一時を樂しんでおました

甯國 自慢の料理が大変な失敗

歩四七・二・二
歩兵上等兵　二宮京造

正月の十日　投網を見つけた私共は　甯國城外を流れる川に魚取りに行きました　大小あはせて五十尾余り　予想外の大漁に凱

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

歌をあげて帰隊しました

幸に前日見つけた種子油と少しばかりの小麦粉もありましたので 天麩羅にして夕食の膳に供へました

久方振りの此の御馳走に一同の喜ぶ顔を眺めて 心密かに自分の働き甲斐のあつたのを喜びました 給與の悪い時のことゝて 沢山作つた天麩羅も 小隊全員取かつて一片も余さず平げました

夕食も終り 対空射撃に出て居て 機関銃を持つて帰つた戰友が「胸が悪くなつたし」と言ふと同時に「ワッ」と嘔吐し始めました 之を介抱しながら どうしたものかと心配してゐる程に 今度は私が変に頭が重苦しくなりましたので 鉢巻して寝台に入りますと 胸が悪くなり急に吐き初めました 戰友の清水君は苦しさうにまだやつてゐます

暫くすると 吐く者 下痢する者等 小隊長殿以下二十三名が さも苦しさうに向ふ鉢巻で呻いてゐます

何分珍しい料理なので 中隊長殿にも差上げましたが 中隊長殿は食はれなかつたので 幸にも此の難を免れられました 皆に御馳走しようとしたことが こんなひどい結果になつたのであります

「北支以来幾度の激戰にも無事で来た戰友を 自分が作つた天麩羅で殺してしまふのだらうか」と思ふと 申訳なさに寝ても立ても居られませんでした

死に勝るやうな一夜が過ぎて 大部分の戰友達は快復しました 又未だ癒らない人達も生命に別條ないのを知つた時 不幸中の幸を神に感謝しました

其の後に判明したのでありますが 原因は油の中毒でした 此の油は 一見種子油の

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やうでしたが 他の油だつたらしいのであります これに懲りて以来私共は食事には充分注意するやうになりました

寧国 通信筒と思つたは爆弾

歩四七 本部 首藤 軍曹

昭和十三年一月頃 大隊は寧国城警備についておりました 寧国は我が警備の「T」形最尖端で 蕪湖寧国間は幾つかのクリークを横切り 峨々たる山岳を縫つて通ずる一本道でした 敵が此の城を包囲し 輸送路は切断され 私共は全く孤立の状態に陥入りました

私が衛生勤務中の或る日 飛行機が立機飛んで来ました 敵の重囲下に幾分かの不安も感じてゐた時とて 此の飛行機の訪れをどんなにか懐しい気持で迎へたことでせう 兵隊達は壁をかゞやかして見上げると 飛行機がポロ〳〵と黒い物を落しました

「通信筒だ」

と喜び勇んで走つて行く途中 ドガン〳〵と天地を震動させる様な大音響と共に土煙を濛々と冲天高く吹き上げました

「さあ敵機だ」と言ふので 早速之に猛射を浴せ 程なく追撃つたのですが 投下された爆弾の一個がクリークに落ちて 沢山の鯉が水面に浮いて居り〳〵お蔭様で時ならぬ御馳走に預りました

團山鎮の苦闘 大行李長の最後

歩四七 本部 後藤軍曹長上等兵

一月二十三日 湾沚鎮へ弾薬を輸送する為 寧国を出発しました

0808

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

翌二十四日 大行李長殿を長として 再び
寧國へ向ひ出発し 園山鎮附近に来た頃で
した 十三聯隊の自動車が道路上に止つて
ゐました
園山鎮の西米位手前では 盛んに信号弾が
上つてゐます
吉武少尉殿が兵隊を連れて行かれると言ふ
ので 私達も一諸に行くことになりました
そして園山鎮に着いた時でした 急に猛
射を浴びました それでサッと陰路口を遮
敵しながら前進しました 此処は左はズツ
と高く 右は平野で 向ふには小高い丘が
ありました
十三聯隊の警戒兵は盛んに應戦して居ます
私達は其の間を利用して前進しましたところ
が 幾らも行かないうちに 壕のためにバタ
と前進不能になりました 早速二三名が埋め
にかゝりましたが 敵の弾が余り激しく来る
ので思ふ様になりません
丁度其の時 飛行機が数十機飛来しました
が 暫くして寧國の方に去りました 私は
飛行機が来たといふので期待してゐました
が 呆気なく去られて拍子抜けの態でした
然し其の間を利用してどうやら壕を通過
しました
そして二百米も行つた頃 敵はラッパを吹
いてやつて来ました
大行李長殿の意圖の下に私達は帶劍を引抜
いて突喊を敢行しました 敵は一時三十米ば
かり後退しましたが 再び逆襲して来ました
この時 私達にはもう弾も無く 喉は渇き
もう最後だと覚悟しました そこへ歩兵の軽機関銃手
がやつて来て
俺はこゝで死ぬかもしれん と言つてお盛ん
に射撃しはじめました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

然し敵は却し攻撃の手を弛めません
歩兵の小隊長代理の軍曹殿は 前の凹地を
占領して居られましたが 皆はもう何にも
言はず 輜重 歩兵混淆のまゝ 再度突撃
してこの山を占領しました この時擲弾筒
手は現在地に残つて 退却する敵に榴弾を二
発射ち込みました
一六〇〇頃でした 無電が通じた もう大
丈夫だと軍曹殿が言はれたので 皆俄然
心強くなり 帯剣を抜いて 残余の敵と必死
に応戦しました
一六三〇頃 友軍の援兵到着 と告げられ
た時は皆一斉に喊声を挙げました
間もなく左三百米の所に友軍の重機の音が
タタタ……と小気味よくし始め 右の高
い山に 聯隊砲の音がし始めました
これで漸く敵は退却しはじめました 松達
は遠敵してゐましたが 敵弾は依然として
何処からともなく飛来して来ます
やがて銃声が杜絶えて 皆がホッと一息つ
た時 だつた一発飛んで来た跳弾が運悪く
も大行李長殿を其の場に打ち倒しました
すぐさま神成一等兵が馳寄つて
「しつかりして下さい」
と言ひましたが もう駄目でした
皆は無念さうに たゞ大行李長殿の顔を見
守るだけでした
日が暮れて淋しい道を 大行李長殿の死体
を車に積み 任務を遂げて嚮導へ引きあげ
ました

嚮導

夜盗四十名一網打盡

歩四七・五・八

歩兵上等兵 牧 満

嚮導で警備中のことです 二月の終り頃

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

衛兵の報告に依り 小隊は命を受け どん
より曇った暮空の下を 城外の焼け跡の家
に入りました
小隊長殿の決意後夫々配置につき 薪を集
め窓を閉め 全く光の洩らないやうにして
しまひました
佐藤分隊長殿を長とした私達は 次々と歩
哨に立ちました 外は真の闇で何んにも見
えません 十時過ぎ頃だったと思ひます
歩哨が
「来た〈〈」と言って来ました
網を横げて待ってゐるとば露知らぬ支那
人達は 大きな音を立てながらやって来
ます 私達は暗い道の両側に着剣して待
ってゐました
奴等は私達には全然気付かぬ様子で行き過
ぎました 暫くして 今度は味噌樽や醤油
樽を引搖いで帰って来ます そいつを少し
やり過ごしておいて いきなり頬を殴りつ
けました
「アイヤア」
と声を立てゝ味噌醤油を捨てゝ逃げやうと
します 投げ飛ばす 頭を殴る
「此の野郎」と掛声と一緒に大地に投げ飛
ばす戦友もあります 揉み合って居る音は
聞えますが暗い為によく判りません
これで第一回は終りました どうも銃と剣
が邪魔になって仕方がないので 今度は薪
を持って待構へてゐました
ものゝ二三十分も経たない頃 又やって来
ました 前と同様にして 奴等の帰りを待
機して 今度は地に伏せて奴等の向ふ脛を
力一杯叩きました
「ワアー」と仰向けにひっくり返ります
そこに飛びかゝって網で引搖ります 味噌
をかぶる戦友 支那人と取組合ってゐる戦

0811

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

友

「誰か」「おい俺だ」暗いので判りません
戦友同志で掴み合つてゐる
家の中には捕つたチャンが大部多くなりま
した　どれもこれも人相の良くない奴ばか
りです　便衣も大分居ます　泣いて居る意
気地無し　うらめしさうに見てゐる者　が
ツ〳〵震へてゐる者　中にはコクリ〳〵居眠
りしてゐる暢気な奴が居ます
「ニイ」と言へば　ポーツとした顔で見て
ゐます　腹がたつて仕様がありません
「又来たぞ」
と歩哨の声です　なるほどやつて来ます
これも同じやうにして引捕へました
かうして一晩中之を繰返して捕へた支那人
を孫数つなぎにして帰営しました　捕へた
のは四十名程居ましたが　これは食糧に窮
した敵が土民を使つて盗みに来たのでした

孫家埠附近　御座岡曹長の散華

歩四七　Ⅲ/二〇
歩兵軍曹　井口福巳

三月十五日　聯隊は孫家埠の敵を攻撃すべく　我が第十中隊を尖兵として甯國を出発
双橋鎮に向つて前進しました
一三〇〇頃　路上斥候として前進中の我が
分隊は　孫家埠南方四粁附近に於て　約二
百の敵と遭遇し　こゝに激戦が展開されま
した　分隊は不利な地形と兵力の寡少にも
屈せず　協力一致して敵を圧迫しつゝ前進
し　遂時部落を占領して　一四三〇頃には
孫家埠の西北方部落まで進出　こゝで暫く
待機しました

0812

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

約一時間半に亘る砲兵の制圧掩護射撃に
敵の反撃が漸く鎮りかけた頃、攻撃前進の
大隊命令が下りました
勇躍再び攻勢に移りましたが　道路の東側
前方に火を吐くトーチカ、右側高地の煉瓦
家屋よりの銃撃うちに　心逸れど　前進容易
ならず　小隊の前進もこゝで停頓してしま
ひました
敵は我に利ありと思ったか　其の射撃は愈
熾んになるばかりです
此の時御座岡曹長（当時軍曹）殿は
「小隊長殿　第一分隊は前進します……」
分隊は各個前進　俺の行く方に来いし
と命じ　真先に飛び出しました　之に遅れ
じと分隊全員躍進又躍進しました　開豁地
の乾田には遮蔽物とてありません　僅かに
低い畦を利用しつゝ　ぐん〳〵　敵へ押迫つ
て行きます　分隊長は躍進しては振返り
「井口、姿勢が大きいし」とか
「躍進距離が長いし」等と敵弾下に自分の
身も忘れて部下に注意して居られます
一躍進した分隊長は　某上等兵に「姿勢が
大きいぞ」と注意し、再び前進せんと立ち
上った瞬間、狙撃せる敵機関銃弾を身に数
発受け　どっと其の場に倒れました
直に部下が駆け寄りましたが　分隊長殿の
魂は　既に靖国の御社に行って居られました
今迄部下を叱咤激励して居られたのに……
致命傷らしい胸部貫通銃創の血潮が　戎衣
を真赤に染めてゐます
夕暮迫る頃　分隊は一先づ後方に集結し
分隊長を失った無念の涙をのみながら、明
日の攻撃準備や陣地構築も終へました　小
隊ではお通夜をして　昇天の英霊を慰めま
した
敵の盲射は夜の更けるにつれて益々激しく

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

無気味な唸りをたてゝ飛び去ります　潰れかけた土壁の窓から　淡い月光が射し込んでゐます　月が好きであつた班長殿に　此の美しい月を一目なりと見せてあげたい　と覆ひの布を取れば　心なしか笑みさえ浮べた物言はぬ顔に　一同の眼は再び潤むものでした

豪勝　肉弾突撃作候

歩四七・I　第三中隊

我々の部隊は　南京の西南へ四十里　山間の一小邑賓國の警備につきました　敗戦以来逃げ散つてゐた敵も　二三ヶ月を経過すると　使気にも再び警備の一線に来襲して来ました　部隊は之が討伐のため三月十五日賓國を出発　孫家埠（賓國東南十二粁）附近に集結する敵を殲滅すべく　中隊は左側衛尖兵となり前進しました

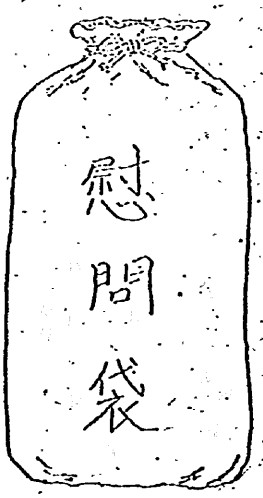
其の時　敵状捜索並に進路偵察のため工藤軍曹を長とする一組の斥候を出したところ　〇〇附近に約百名の敵が集結してゐることが判り　直に中隊に報告して来ました　工藤軍曹以下の斥候は尚も敵中深く進入捜索を続行してゐます　この時中隊は主力と共に砲兵の掩護下に本格的攻撃を開始いたしました

之を見た斥候長は　部下をひつさげ弾雨の中を経進し　敵退却の掩護陣地の側背に迫り　肉弾を以て突入しました　不意を突かれた敵は悲鳴を上げて逃げだしました　其の敵を無二無三に突き殺し　立どころに七名を刺殺しました　この息はぬ　破綻に立ち向ふ敵もなく　僅か数名の斥候

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

兵のため百に余る敵は我先にと逃げ始めました

ンの為に後方本陣地を守つてゐた敵も急ち動揺を来し遂に敗退の止むなきに至りました



歩四七・I・二

歩兵上等兵　竹本満

「慰問袋々々」

はしやいだ兵隊の声がします　待ちに待つた慰問袋が来たのです　見る〳〵うちに兵隊達の顔は朗かになりました

艶の生えた予備役の兵隊達も慰問袋を開いて子供の様にニコ〳〵して居ます

日頃は苦虫噛み潰したやうにムツツリ屋の○○君も今日ばかりはまごゝろ籠つた数かずの慰問品を前にして微笑じて居ます

「ワアツ俺のは食堂の女給さんからだ」

艶の兵隊が頓驚な声で叫びました　そして

「おい〳〵皆聞け——私の貴男様——と書いてあるぞ」

彼は「私の貴男様」がひどく気に入つたらしくさもうれさうに慰問文の封を切りながら

「待て〳〵　中味を拝見するから……書いてあるぞ

——東洋を守る兵隊さん——ふフン……

——このゴールテンバットは貴男様の奥様になられる方が一寸吸つたものと思召して　召上り下さいませ——」

と得意の鼻すうごめかして読み上げます　誰かゞ「やけるぞ〳〵」と奇声を発しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

更に彼は続けます
「私の慰問袋をお受取りになられたお方は
晴れの御凱旋の節は 私の良い夫と思ひ
ます……」
兵隊達はどつと爆笑しました

青松葉の新

歩四七ノ二ノ六
歩兵軍曹 仲村渠 守一

三月十八日 當時宮國警備についてゐた我
が第二大隊は 三十六旅團の指揮下に入つ
て 廣德附近の討伐に参加しました
私達の小隊は野戰病院の援護に任じつゝ後
方を前進してゐました 天気はよし 風は
吹くし 一同の顔は黄塵のために鍍金され
てしまひました
「チャンコロの奴 要らんことするもんだか
らゝ」みよし。
などこぼしながらも 鼻唄交りで任務につ
き 夕方になり後方部隊は十里舗南方高粱
位の松林に露営することになりました
そしていざ夕食を炊く準備にかゝつて見れ
ば 部落は無し 水は無し 途方に暮れて
しまひました それから一生懸命探し廻つ
て漸く見つけだしたクリークが 何と味噌汁
のやうな色をしてゐるではありませんか
それでも皆よろこんで夕食の準備を急ぎま
したが 今度は薪がありません 然し兵隊
の手にかゝつては何も出来ないとは言はせま
せん 銃剣を引抜いたかと思ふと なんと、
附近の松の樹に向つて突進です
ゆくて青松葉の山が出来たかと思ふと 忽
ち色がついた飯が出来ました 一同笑ひさ

0816

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ざめきながら空腹を満たしました

さて翌朝起きて見ると、葉をつけた松の樹は一本もありません　窮すればなんとやら で　野戦に来て色々な事を体験しました

内地の人々にはとても想像はつかないでせう　味噌汁みたいなクリークの水で炊して青松葉で飯を炊くなんて……

戰塵洗ふ
クリークの魚取り

歩四七　工　本部
輜重兵伍長　大石千太郎

窮屈な備中の或る日のこと　誰かが
「八中隊は昨日城外のクリークに魚とりに行って　盆二杯もとって帰ったよ　俺達も一度行かうぢやないか　何処のクリークでも魚がウヨ〳〵してゐるさうだ」
と言ふのです　其の日の午後相談一決
「それでは明早朝といふことになりました」
兵隊達は食ふことになるとすぐ気が揃ふのです

明くれば三月二十五日　七時半　一同勢揃ひして　立網と盆二つを持って西門外に繰り出しました

網を担いだ兵　銃を担いだ兵　盆を持った者　棒を持つ者　単調な単列のみ見馴れた私共の眼には滑稽な姿に映りました

クリークに到着しました　水は茶色に濁ってゐます　両岸から竿で水面をたたいて魚を真中に追ひやり　立網を張りましたが一尾も居りません　一同がっかりして居ます

と　先に行った一人が
「おい　此方のクリークに居るぞ　早く来い」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と大声で呼んでゐます
「そら行け」元気を取り戻した皆は駆足
です　今度のは前のに較べて遙に大きく
水もきれに澄んでゐます　相當に深いらし
いので石を投げ込むと　でかい奴がバチャン
と銀鱗を朝日に閃めかして跳返ります
水が深いので此の魚を獲るには若干の工事
が必要です
「土堤を切り開いて水を流し出せし
命令一下　附近の農家から有合せの鍬など
を持って来て　ヨイショ〳〵の掛声も勇し
く　忽ち大きい溝が切り開かれ　ゴブ〳〵と
流れ出るクリークの水は　見る〳〵うちに
減って行きます
水の引いた岸辺では魚が跳返ります　雀躍
りした一同は　早く網を張れ　とばかり
クリークの端から端へと張りました
「そら曳け」

「第組は水面を叩いて魚を追へ」
「其処をもつと上げんと　跳び出すぞ」
騒しいこと　まるで火事場の様です
クリークの三分の二程も進むと　魚は益
々活潑に跳上ります
「網をもつと早く曳け」
「そうら　飛び出たぢやないか　今のは大
きかつたぞ」
「うん　大きかつた〳〵」
逃げた魚は支那でも日本でも大きいらしい
のです
陸から見てゐた連中も堪りかねて　素裸に
なつてクリークにとび込みました
食ふか　食はれるかの瀬戸際で　魚も人も
必死です　勇敢な魚は　網をとび越えては
兵隊と正面衝突して　水中に潜り込みます
それでも一回の網で魚の三分の二程獲れ
ました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

此の頃クリークの水は愈〻少くなり もう底が見える様になりました 兵隊達は泥の中の魚を追ひ廻してゐます 大きな魚を両手に掴んで岸に投ぬやる兵 クリークの真中で両手に一尾づゝ握つた上に 一尾を口にくわへてもて餘して居る者もあります

二回目の網で遂に一杯溢れるばかりになりました

「大漁だ さあ帰らうし」

今日の手柄話に花を咲かせながら 意気揚揚と引あげました

其の夜これ等の魚はぶつた切りの荒つぽい野戦料理で 私共の食卓を賑しました

明けても暮れても硝煙臭つく戰闘後の一日 全く痛快な魚取りは 一しほ印象深いものがあります

感心な姑娘

歩四七 1/1 本部 佐藤 上等兵

十三年四月十五日頃 私の馬が怪我をして蕪湖病馬廠に入廠中の話であります

或る日 歳の頃十八九の姑娘が 青草を持つて来ました 病馬に青草——私はどんなに喜んだことか 早速賣買の交渉が始まりました

「這個賣麼」(これは賣るのか)

「是 兩毛錢賣的 您買不買」(さうです 二十錢です お買ひになりますか)

「大貴 我買半毛」(高いよ 五錢なら買はう)

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「沒法子 半毛錢行」（仕方がありません 五錢でよろしいです）

こんな問答の末 五錢で買ひましたが その姑娘は 私が馬に草を食はせる間 甲斐々々しく手傳ってくれました

そしてずらりと並んだ澤山の馬を見て

「都您的麼」

（みんなあなたのですか）

「不 我的一個 這是我的」

（いや俺のは一頭だけ これが俺のだ）

「您的馬 天好」

（あなたの馬は立派ね）

「我的馬 有病那」

（俺の馬は 病気だよ）

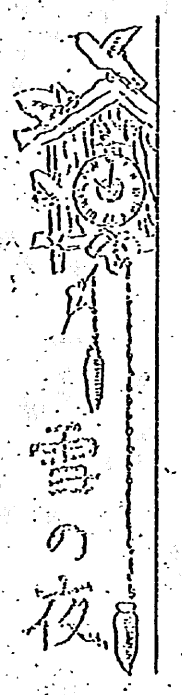
姑娘は判つたかどうか あやしげな支那語でこんな會話が交された後 帰つて行きましたが 彼の女は翌日も 其の翌日も 代金は取らずに 私の馬に青草を與へてくれました

此の病馬廠では 支那人の出入を禁じてありましたが 實によくしてくれますので 時折不用な品物などお礼に與へてゐました

彼の女は如何にも馬が好きらしく 毎日かゝさず草を持つて来てくれました

今日はこんな酷い雨降りだからまさか来やしないだらう と思ひながら厩に行つて見ると 長いまゝの草がやつてあります

抗日意識の徹底してゐる中支で 斯ほど迄に親切にしてくれる姑娘が居るかと 感謝してゐました



雪の夜

歩兵七・二・二 故歩兵上等兵 後藤幸義

辺りは寂として 降りしきる雪の崩れる音

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と パチ〳〵とランプの芯のはぢける音ばかり

日誌を記し終つた私は一日の無事を神に謝し乍ら 考へるともなく故國の事を思ひ浮べてみました

茅葺々々の声に送られて懐しの故國を後にして早や七ヶ月余 何時もの元気だ 心配なく御國のため働け」と言ふ便に接しても 折にふれてやつぱり思ふ「そんな事を考へてはならぬ」と親父の声が聞えるやうです 然しいつしか脳裡には故國の山河が そして年老ひた両親の姿が浮びます

一しきりランプの光が大きく揺れて修繕づくめの支那時計のきしみにつれて十時を報じました

今頃歩哨も交代してゐるでせう 犬の遠吠が聞えます「寒かろう」幾十の戰友の眠を護り微かな物音にも細心の注意を怠らない歩哨に感謝しました

暑い〳〵と言ひつゝ出征して以来 紅葉の秋の訪れも

他所に前進又前進 幾多の戰斗に華と散つた戰友を想ひ出しては感慨無量です

常に天晴な戰功と無事とを祈つて居られた皇族の人々に対しては無言でなりません「お祈り御長後でした たゞ君國の為と御考への上 御安福を御祈り下さい」と書き送つた手紙もつゞう〳〵問遣であつてくれ」と祈つて居られたふうに

過ぎし保定の攻撃 杭州湾の上陸戰闘 青浦攻略とひた押しに前進 敵が最後の堅壁と頼みにしてゐた南京城も遂に陥落しました

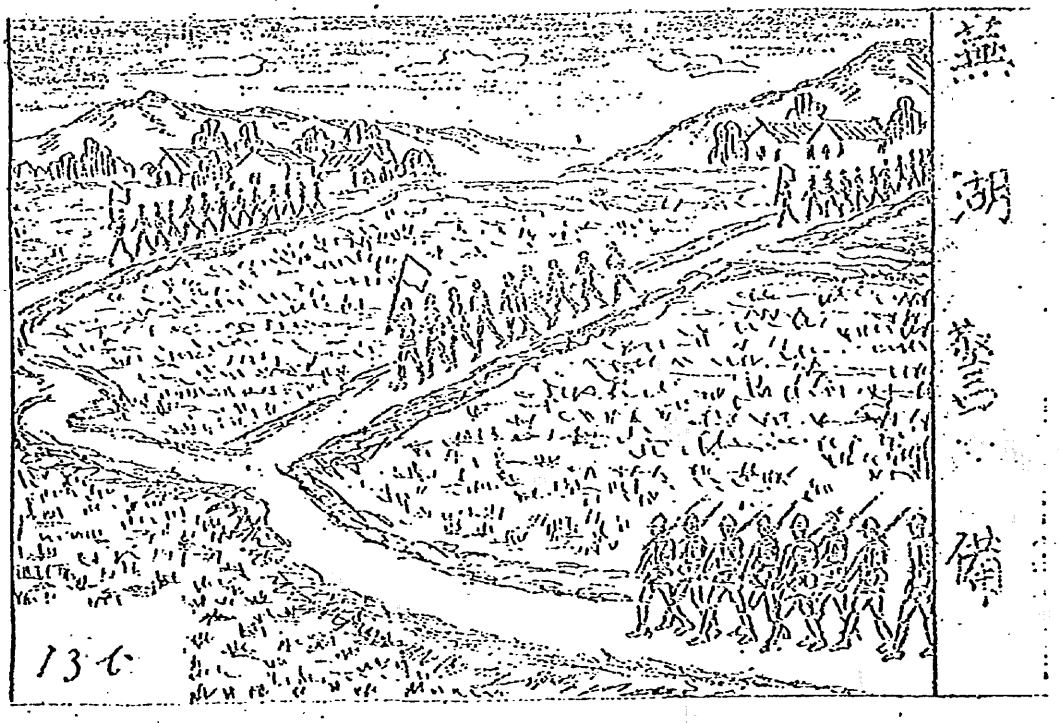
戰勝の喜びは大きい けれどもこの大いなる喜びの裏には勇敢な戰友の犧牲と熱烈な銃後の人々の祈りが秘められてゐるのです 唯感謝に堪えません

さうです 今後益〻奮闘せねばなりません 抗日の迷夢を醒し親日の若芽の根強く榮える日まで そして東洋の平和が訪れる日まで

雪はまだ降り続いてゐます

—遺稿—

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



續々敗残兵が出て来ました

歩一三聯隊長 起田清

昭和十二年十二月十六日。八。。頃進路右方二白米の村落にとても長い竹竿に白布を着けた物を盛んに打振つてゐるのが目につきました

遠くてよく分りませんが隨分人が居る模様です

それは南京を落して間も無く我が部隊が入城にも参加せず 蕪湖に向の前進してゐる時であります

そしてその設営隊の最後尾を設営者として前進してゐたのであります

其の時は附近一帯の民衆からは無数の白旗を振り出してゐました

敗残兵と雲て

と言い出した者もありましたが、雲たせま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

せんでした

最初五十名の一團が恐る〳〵近寄つて来ました

たが　皆正規兵です　武器といつても帶劍

も持つてゐません

設營隊長に連絡を送りましたが仲〻止らず、

もう千米ほどを前進しております

仕方なく近寄つた者を取調べて見ましたが

それといつても暗兵器の有無を調べるだけ

です　其の内に速射砲と野砲の設營者も加

つて二十名余りになつたので力を得ました

最初近寄つた者は何も危害を加へぬ事を知

つて部落の方に向つて何か大声で叫んでゐ

ました

すると見る間に五・六十名の數團が續々近付

て頻く間に數百を數へる様になりました

敗殘兵は

三日も食ずに動けない

と言つてゐました

それでも少くも五百名は下りません

場合の樂でも相手が余りに多く居して　重

火器部隊の者でゐるので小銃も全く持つて

おりません

その内設營隊長より

自轉車を持つてゐる者は本隊到着まで監視

してお呉

と言つて来ましたが　誰も残る者はありま

せん

仕方なく集合せしめただけ連行しましたが

設營隊に追及するまでに又百名位は加りま

した

一一〇〇紅寧鎮に到着しました

途中飛行場に二十名位殺しましたが

それに各隊の設營者が使役に使い

来た二百二名を残つてゐました

各隊共必要なだけ連行した上だけ

に後はお構いなしです

他部隊でも約百名位使つてゐたので

もう充分なのです

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

止まを得ず給水上陸点に臨見を命じました
そして宿舎の設備の終る頃
間合に何人でもするから使って呉れ
と地面に頭をすりつけて哀願する者も居りま
ましたが　この二面に名を旅団に引渡しま
しました

燕湖

歩兵工廠部會より

嘉慶書長

燕湖の警備は三ヶ月居りましたが　燕湖の
生みの親は十三聯隊が交代からうかと思い
ます
南京で一晩泊り翌日は早速燕湖に向ったん
ですが　まそこは火野葦平の居た第十八師
團が占領して居りました

其処へ大隊本部と第一第二中隊がトラック
で出発し中度けました
第十八師團は燕湖に行った様で　火野葦
平の　文と兵隊　には詳く書いて有り
ます
その燕湖を人でいるが　日一日と治安が恢復
して行きます
君らが　一晩と二日間を右に陣地に燕湖に行
って帰って来ますと　見違る様にきれいに
なって行く
それを見るのが楽しみでした

高島曹長

北支以来の兵隊は皆　燕湖の思い出を口にし
ますが　それまでは兵隊も金の貴い場所が
無く皆白円位持って居ました
それが大概使い果した様でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

それを行に邀撃の目的を理解して復旧して行く無湖の思い出は忘れません

有馬少佐

内地で夜間演習をする時は南部を利用して居りましたが 例へば分隊長は眼に南部小隊長以上は有に十家と言ふ工合にです

処が保定追撃の時 第一大隊が敵の背後に出て突撃したのです

丁度内地の様に標識を付けましたが 之が

と人と判り会へ

それで爾後大隊は隊長以下首に手拭を巻けと言ふ様なそうです が、 これは窮戰から創出した好い方法として感心して聞きました

第一附寒用にすると 一舉 兩得と思ひました

軍騎 新友軍の急を救ふ

歩一三ノ四

中尉 上田秋雄

昭和十三年一月十五日一二〇〇私の第一小隊は第三中隊の四宮小隊と山口部落の警備交代を完了しました

その申送りに

五 行南方には小数の敵あり

と言ふので 午後早速金子伍長の指揮する一分隊を斥候に出したら四行位の部落で手二つ つき有する二十四名余りの敵と遭遇して来ました

たので 其の夜は全員配備して待機しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

が何の変化もありませんでした

翌日は五十高地に展望所を立て、今夜は又非常警戒をせねばならぬので警固は出来ないだけ警戒をさせました

午後の五時頃展望所からの報告に依りますと

「鉄道線を約五十余り北進中敵が土民が剥断はつきました人」

と言ひます

当時は亜湖の沿岸が復活されて毎日土民が荷物を持って帰還するので

「多分土民に違ひない」

と来るのを待っておりましたが三十分経っても来ないので（これは怪しい）

と思って原口上等兵小川正市藤田原上等兵の三名を直ちに前の台に斥候に出しました

すると敵です

「敵が以前構築した壕に居ます」

と言ふので「五十名位の敵が今出発」と叫いでいる」

と言っていらっしゃ

伝しました

所が敵は鉄道線路の北方の台から山の東の山にかけて五百位居て我軍に對して迫撃砲の集中射撃を浴せて来ました

「自分の兵力では現実は不利である」

地に據って敵を邀撃する方法は十倍の敵も

と陣地防衛することに意を決し陣地に後退

恐らくに足らず」

すると分隊長を集めて信念しめました

加丁度暮れ方であるし敵に察見される

ことなく後退することが出来ました

後退の途中は五百米位でしたが

「こんな状況の悪いことはありません」

敵に背中を見せる程気味悪いことはありません人

敵は一発も撃ちませんでした

引上げた時は全く日は暮れて一部の警戒を

出し皆を集めて翌朝十二分の注意をする

どう割ふ」この状況を無別に在りし警備

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

司令部(十一)旅團長閣下に報告し
「到る早く兵力を増援を要するこの重大任
務を遂行する者は居ないか」
と言ひば直時連絡下士官たる高木入來上
等兵が申し出ました
「高木をやって下さい」
「馬に乘れるか」
「乘れます」
よし頼むぞ
状況は今見た通だ　山口は死守するが一刻
も早く増援を出さねばならぬ頼む
夕食は無用でもれば成る丈け早く出發せよ
と全く暮れて寒氣迫るのに支那馬に鞭當て
十六日十六日一八三〇出發しましたが
全員高木上等兵の無事を祈つておりました
電話を来ておりましたが　十五日に故障が出
来て今朝通信班の者が修理に来ましたが未
だ直らず
明日又来ます

と言つて畫間の内に蕪湖に帰つてゐました
小隊に帰令出ましたが支那兵を一掃出して
ありましたので此が大変良かつたのですが
年老つた馬のことゝて蕪湖からの帰りには
代隊から借つて来た位いで　二一〇〇哩
任務を終つて帰つて来ました
その翌朝十七日〇二〇〇哩約五十名の敵が
五〇高地に突撃して来たのを やつと撃退した
時蕪湖からの第一中隊長の指揮下に三個小隊と
機関銃一ヶ小隊とが来てくれたので　それから
第一中隊長の指揮下に入り五〇高地の守
を警備しました
それから此の日拂曉から敵約二千余りが攻撃
して来ましたが遂に十三時隊全部出動して此の
敵を撃退しました
高木上等兵の積極的勇敢なる行動に感
つて小隊は遂に山口警備隊を立うすることが
出来たのであります

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

故眞原伍長の日記より

歩一三ノ四

昭和十二年十一月一日　月曜日　晴

来信　田中玲子　村上重夫　田中典記
中村つぎの　小中登　田中玉代
巻信　田中茂　渡邊蓉　黒松吉雄
田中宗子

上陸戰斗演習後休養　船上ニモ慣レタ
性タラウ何トモナイ　四方ノ景色ヲトテモ
良イ

昭和十二年十一月二日　火曜日　晴

午前中上陸戰斗演習　午後休養ナリ
慰問袋ヲ支給サル日用品タラサンアリ雑誌ヲ
讀ンデ休養ス

昭和十二年十一月三日　水曜日　晴

明治節行幸式陣中ニアリテ大帝ノ御聖德ヲ
偲ブ
皇室ノ御榮ヲ祈ル　甲板上ニテ　九〇〇遥拝
可アリ
揚陸口　機銃配アリ　甲(三)　乙(二)　弾薬小銃
弾ニ〇〇　発　煙筒一ヒ　水上発煙筒一　催涙筒
就テ榴弾二出発準備ヲ完了シ一九〇〇夫ヨリ
食事ノ準備ヲシテ寝ニ就ク

昭和十二年十一月四日　木曜日　晴

愈々敵前上陸ヲ敢行スル日カ明日ニ迫ツタ船
内生活モ今日デ八日目ダ陸ニアコガレテ斗
ヒヤウナ感カシテ向岸ノ敵ヲ早ク来遥シタ
イ氣持カ山々ダ　身モ整装ニシテ整ヘ待フ
〈明日ヲ

昭和十二年十一月五日　金曜日　曇後雨

朝早クカラ今日ノ上陸ヲ思ヘバ眠レナイ然
モ神ノ御陰デアラウ曇天ダ
早ク敵前ヘ突入シタイ氣デ山々ダカ発動船
ノ到着ヲ待ツノデ詰ネナン

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一〇〇〇〇糧船ニ〇〇〇〇糧陸運隊ノ砲撃敢行
機ノ爆撃ノ下ニヤット取ツイタ
海邊デトテモ泥水ノ中ノミダ辛マデ渡ル
道ヲ前進ノ雨ガ降リ出シタノデ困難道
ノ悪イコトハ話ニナラズ
揚陸セル数モ極手モ皆捨テタ　地下足袋ナ
ノデトテモ滑ル、金山ニ於テ一時間ノ休止後
ヲ夜間行軍ヲ續行セリ
昭和十二年十一月六日土曜日晴
雨ニタ、カレツツ前進ヲ續ケ夜明ニ有働
部ト會ツタ　銃モ泥ダラケダ　孔ヲ泥ヲ作
ツタ人形其ノ物ダ　一〇〇〇敵ト遭遇シ一
時間ノ戰斗後敵退セリ
家ヲ内地作リトカシモ変ナイコトデ拾ヒ内
地ノ秋末寒冒ノ如ク感ガスル　史実ヲ知
ラニ過リ悲惨ノ極ナリ
一四ノ〇松陰鎮著……
一八〇〇焦林村ニ宿營ス　後ニナルト鎮聲
聚シタリ

昭和十二年十一月七日日曜日雨
〇六〇〇同地発雨ハドンヨリ降ルヒシヨ濡ダ
食ノ黄浦江ヲ渡河セネバナラヌ　或ダケ渡
河ニウツルヤ敵迫撃砲ハ身近ニ炸裂ヲスル
早速ニテ安全地帯ニ入ル　輜隊衛護隊トシ
テ本部ニ至ル　突然占領　我船ノ監視ヲ命
セラル　一八〇〇同地出発　一九三〇船ニ乗込
ミ敵言戒ス
昭和十二年十一月八日月曜日晴
戰場晴レテ良ク氣持ニナツタ　銃聲モ余
リシナイ　銃ノ手入ヲシ被服ノ洗濯ヲナス
疲れキタメ部落ニ徹宿ニ行ク
大キイ船ニ一ケ分隊ナノデ部屋ヲ片付ル
徹宿ノ隊付デ暇一杯ダ
遠クニ敵ノ反撃ノ爆音機ノ活躍ヲ見ル
敵ノ退部スルノモ見エルノデ愉快ダ
昭和十二年十一月九日火曜日晴
突然引上ノ命ガ来タノデ急ギデ朝食ヲスル
横レテ居ル船ガアルノデ下流ヘノト思ハレル

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

北ノ儘デハ敵ノ中ヘデモ流レテ行キハシナイカ
全部一生懸命ダ 時々敵襲ガ来ルノデ地断ナ
ラヌ 一二〇〇頃中隊ハ後退
中隊ハ機関隊トシテ前進 夜ニ入リニ乗ジ交戦
ス 食ノ為ト 火災ト トニテ起ル
昭和十二年十一月十日 水曜日 晴
昨夜ノ行軍ハ儘夜ヲ明ケタ
佛暁ハ敵ヲ追撃 四中隊ハ機関隊ニ接後ス
敵ノ戦死数千遺棄シヤリ 一三〇〇天関白ニ達
シ軍隊ト合ス 支那家屋ニ宿営ス 機械化
シテシマッタ
昭和十二年十一月十一日 木曜日 晴
〇六〇〇起床 〇七〇〇出発 途中ハ敵ヲ追撃ニツ
イ急行軍 夜ニ入リ交戦食ヲ敵シ我等ハ
大隊本部直轄警戒ダリ
途中支那兵ノ再ニヲ敗走スルヲ見直ニ軍
事ヲ占領シ次イデ下リ兵ヲ三ヶ所ニ捕捕シ
師団ノ後衛ニ使用セントノ指示アリ 之モ
五百位ノ敵アルヲ発見急角雲ヲヤレトモ一ケ

今隊デ思フ様ニ行カズ
夜除公橋頭陣地ノ敵ヲ掃蕩シ二十二時思者ハ
護衛ニ任ズ 田中、増永 両上等兵ハ負傷ス
夜ニ入ルモ銃撃盛ニ激シ
昭和十二年十一月十二日 金曜日 雨
除公橋頭陣地ノ敗敵掃蕩ヲヤル
正午下士官トシテ服務警戒ス
朝食ノ時宇部官者ト一緒ニナル
雨ノタメ寒クトテモ辛ニルタテ困難ス
一六〇〇宿舎ノ夜更アリテ第一線警備ニ
当ル 敵ノ電話室ヲシキ所ニ入リテ寝ル
陣地構築モ中々困難ニイテ進行シナイ
十三日 土 晴
正午除公橋頭ヲ立テ嵐山ニ向フ行軍ハ本道
路上ナノデトテモヒドイ
敵ノ死体ガ累々トシテ トテモ腐敗ダ
自動車運輸教知迫撃砲ガ散在シテヰル
嵐山ノ地点ニ於テ猛烈ナル抗ヲシタ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵彈ガ内部ナリヤラテ未ル
迫撃砲モ右ニ落下スルハ下中々不安心ダ
デモ不発バカリデ大助リダ
猛烈極キノ戰斗ダ一夜中寝レナイ位ノ射撃
ダッタ　葉ヲ吸リテ警戒ス

十一月十四日　日曜　曇

友軍モ早ヤ彈藥カツキテシマッタ
部落掃蕩ン確保ス　彈藥ノ補充アリ
小銃彈三〇〇〇ヲ搬彈　五組交ウズ前進ニ移
テ警戒ス　友軍飛行機煙幕敵ヒ　敵ハ
遂次退却ノ徴候アリ

十一月十五日　月曜日　晴

〇一〇〇崑山攻撃ノタメ出発　出発隊ハ依然軍
旗中隊　戒第ハ軍旗ノ前方ヲ警戒シツツ前進
前日迫敵ノ頑強ニ抵抗シアリシ陣地ヲ見ル
〇六〇〇崑山東方約二粁出ス　交戰　敵ト友
軍ト入乱組盡ナモノナリ
市街戰ニテ捕虜者出ル　崑山ニ宿営ス

十二月十六日　火曜日　雨

崑山ニ宿営　從前ノ習慣戰死ノ報ヲ聞ク
皇国ノ為トハ言ヘ御気ノ毒ダ
宿舎夜襲サル　依然軍旗中隊ナリ
彈藥補充ヲ行フ　雨ノ為滯レテ困ル
何等ノ調味品モナイノデ米ベカリ喰イテ食ス

十一月十七日　水曜日　雨

崑山ニ於テ休養トナル　朝カラ相変ラズ雨
ダ　街内ノ情況ヲ見ニ行ク　煙突ニヨリ見
ラレザル水況ダ　第九師團ノ長カ通ル後
第八葛洲攻略ニ行ク由　敵モダマッテ引イタ
ラシイ　銃聲モシナイ明日出発ノ豫定ナルタ
メ準備ヲナス

十一月十八日　木曜日　雨

〇四〇〇起床　〇七〇〇出発雨ガ降ッテ中々
用ル　〇八〇〇軍旗護衛ヲ交代シテ中隊
復帰ス　道路ガ劣ニヨイノデ進行ス

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

第九師團ノ部ガ一パイ来テオルノデ神慶ニ
ナッテ仕様ガナイ　一七〇〇宿營地安亭鎮着
十一月十九日金曜日雨
今モ相変ラズ雨ダ　引返ノ行軍ナノデ死体
カ累々トシテ曝露ヲ放ツ　〇五三〇出發スグ
濡レノ行軍ハ夜ノ寒イノデ困ル宿營地大橋
頭着一七〇〇宿營鶏ガタクサン居タノデタ
食ハ御馳走ダッタ
十一月二十日土曜日雨
行軍ニ雨程ツライモノハナイ今日ノ雨ハ特ニ
ヒドイ　〇七〇〇出發中隊ハ軍旗中隊ナリ
途中松江西方ニ於テ橋梁破壊セラレタタメ
三時間位停止
雨ハ頻ニ降ルニ三〇〇宿營地芬陵ロニ着ピ
ショ濡ノ服ヲ乾ス
十一月二十一日日曜日雨
雨ニハモウアイテ来タ中隊ハ大兵トシテ行
クロ四十七聯隊ガ行軍ノ邪魔ヲシテ困ル
雨ガ三道路ニシヨンボリ立ッテオルノハ中々ツ
ライモノダ　金山ニ於テ糧秣ノ補給ヲナス
風景鎮ニ於テモ同ジ運搬加給品等更給サル
橋梁破壊ノ為砲兵前進見ツカ他ナラズ
寒気ハ一入加ルト言フ水況二四〇〇嘉善ニ着宿
營ス
十一月二十二日日曜日晴
第一目的地嘉善ニ着イタノダ今日ハ休養
ダ昨夜遅カリシタメ朝食ヲ一〇〇〇頃ナス
今日ハ晴ダ　爆雲デ服モ乾ケラレマ惨状ダ
道路モ建物ガ倒レテ歩カレマ
両道ヲ散歩後被服兵器ノ手入ヲナス
十一月二十三日火曜日晴
早ク起キ大隊本部第八射殺ノ命ニ依リ敵奈
ニ行ク　牛ニ頭　鶏ガ七十羽位敵奈ス
マダ附近ハ物資ヲ各隊ヨリ出テオタリ
破穀カタクサンアッタノデ籾ヲシテ食ベル

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

一〇七〇〇本部ニ引上ゲ　鎮ノ御壁走ニテル

十二月二十四日　水曜日　晴

〇七〇〇起床朝食後洗濯ヲナシ　モウ水ガトテモ冷イ　夜具ノ微塵ニ行ク　衛生ニ関シ注意事項アリ　飲料水ハ東風外瑚水車ヲ利用スベシ　明二十五日公会堂デ衛生講話ガアル筈

十二月二十五日　木曜日　晴

〇九〇〇整列シテ公会堂ヘ衛生講話ヲ聞キニ行リ　主トシテ回レラ菌ニ関シテノ話アリ　一四〇〇兵器検査　微塵島ノ分配ヲナス

十二月二十六日　金曜日　晴

〇九〇〇東北門下士哨ヲ交代敵務ス支那兵ガ遺棄シタ手榴弾デ国外ノ魚ヲ捕ル　魚ヲ焼イテ食ベタラトテモ美味シカツタ　明日ハ出発ヲシイ

十二月二十七日　金曜日　晴

〇六〇〇下士哨ヲ引上ゲ中隊ヘ帰ル　〇七〇〇出発ナノデ相當多忙ダ　〇八〇〇嘉善斎　雨模様ナレドモ降ラズ　南京ヘ〳〵ト行軍ヲ續行ス　一七〇〇双橋ニ着宿営ス　鍋島北川　安部喜野戦病院ヘ入院ス

十二月二十八日　日曜日　晴

晴ノ日和デハアルガモウ寒イノレニクリ　ークカラ吹上ル河風ガ何トモ言ヘヌ肌寒サヲ感ル　〇七〇〇双橋発途中平望鎮ニテ父サンニ葉書ヲ送ル　橋梁破壊サレタルタメ行軍意ノ如クナラズ　一八〇〇嘉興鎮宿営

十二月二十九日　月曜日　晴

〇七〇〇嘉興鎮発三日ノ連續的急行軍デ相當クタビレタ　今日ハ休憩地范村ニ向

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

フ道路ハ良イケレドモ足ガ痛イノニハ困ロス　一六〇〇目的地着トテモ荒果タ
草屋ニ宿営スル　何貴ガ何モナイ

十一月三十日　火曜日　晴

休養ガ朝カラ光濯ラナンテ体ノ掃除ラナス
丁度河邊ノ宿舎デ良ダッタラト思フ位ダ
自然ノ景色モトテモ良イ　明日ノ出発準備
ラナシ　大行李梱護トシテ残ツテ外タ
峯上第五中隊復帰ス

十二月一日　水曜日　晴

聯隊本部ニ追及スル多メ。六〇〇。本部ガ
多イノデ思フガ如キ行軍ガ出来ズ　本部モ
二里位シカ離レテヰナイケレド　追及スル
豫定ナレドナシ得ズ　湖洲西方部落ニ殺テ
休宿ス　湖洲ハ水ノ都デトテモイ、所ナリ

十二月二日　木晴

南京ヘ〳〵ト行軍各部隊一番乗リヲ競
ヒ　山間ノ西四ノ道路ヲ縫ヒ〳〵内地ノ〳〵ヲ
ナ景色ヲ眺メ水ヲ呑ム　休養ス

十二月三日　金曜日　曇

宿営地出発。六〇〇。自動車ノ護送シアリヲ
見ル　如何一線部隊ガ苦労シタカガ思ハレタ
戦死者ノ墓標立テリ

十二月四日　土曜日　晴

愈々聯隊ハ南京攻略ノ第一線ニ追出セリ
思ヘバ蕪山ヨリ白数十里南京ヘ〳〵ト我部
隊ヲ追越シ〳〵漸ノ攻略ニ鼻ヲ揃ヘルコト
ガ出来タ　思ヘバ一番乗リヲ揃キツ、足ノ
宿ヲ休ノ疲ヲ忘レテシマフタ

十二月五日　日曜日　晴

抗洲湾ニ敵前上陸ラシテカラ一ケ月マア歩
イタモノダ　首都南京モ後僅カノ地トナ
ツタ　後尾カラノ行軍デイツモ急行軍ダ宿

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

金ガナク　二二〇〇頃着支那避難民ノ休所
ニ乗リ込ンダラ砂糖等ノ甘味品多クアリ
微察シテ馬ニ乗セル　霜ガドッサリ降ッテ寒
イ朝ダッタ

十二月六日　月曜日　晴

朝大霜デトテモ寒イ昨日遅カリシタメ出発
ガ四時ッテイデモ日差スハ南京ノ〳〵ダ調味
品ガ入ッタノデ背嚢ガ重クナッテ来タ
今日ノ行軍ハ何時モヨリ苦ヒドイ　夜行軍
ニウソル　寒イコト　話ニナラン

十二月七日　火曜日　晴

夜行軍ノ儘夜ガ明ケタ　第一大隊ハ前衛ダ
〇八〇〇頃休止ニ入ッタケレドモ又スグ出
発足ノ痛ミ増シテ来タ　ケレドモ南京ヲ思
ヘバ益ヽ勇気ハ百倍ダ　分隊二足ノ軍靴
交換ヲナス　非常急ヲ要スルノデ急ダコトク
一八〇〇頃某部落着大休止ヲ行フ

十二月八日　水曜日　晴

霜ヲ踏ンデ出発シ　前進中隊ハ大兵中隊ナ
リ愈ヽ友軍第一線一一四師ニ追及シタ
銃聲ハ響ク出シタ　彼等ヲ越シテノ前進ダ
一四〇〇頃河川偵察ニ出テ射タレタケレド
我ニ損害ナシ　抵抗スルモノダ一高地ヲ占
領後ハ確守シタ　一夜敵ト對峙シツヽ霜ニ
ウタレタ儘休止スル

十二月九日　金曜日　晴

高地敵刺峠ノ儘夜ヲ明ス頭ヲ霜ガドッサ
リ落チテヰル　昨日ノ河川偵察デピレヨ湾
ニナッテヰタノデトテモ寒イコト、前進ヲ
初メタケレド敵モナカ〳〵迫撃ダ各分隊道路
ガサ心ニ敵開攻撃ヲ始メタ砲弾ノ来ルニト
キ首ヲ敵砲兵ノ觀測所ガアルランタ　我
来スル砲弾ハトテモ弾着ガヨイ正ニ頃半首
山ニ向ケ前進ス　尾前一等兵負傷ス

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十二月十日土曜日　曇

砲煙弾雨ノ中ヨリ天モ墨ヲ流シタルガ如キ火災ヲ起リ相當ナモノダ　〇八〇〇頃牛首山一帯ノ敵ハ總退部ヲ開始シ機ヲ急セズ追撃ク水ロト言フ所迄デ休止ス敵ハスグ前面ニアリ輕裝甲車ガ前進スル我モ前進ク又警戒ナル陣地アリ抵抗スル敵モナカリシ張イサスガハ將今ハ勝下ノ軍隊ダ　小隊ハ軍旗小隊トナリ聯隊本部ニ至ル砲弾ハ盛ニ落下スル

十二月十一日日曜日　晴

霜深シ　其高地ヲ占領シ夜ヲ徹ス　終夜砲弾飛来スル工ニ霜ハ降ルシ寒イコト御話ニナラヌ　漸ク火陽ガ出テホットシタ　後方ヨリ持ラ来タレシ握飯ニテ腹ゴナシ　砲弾除ケノタメ壕ヲ堀ル　前線ヨリドシク負傷兵ガ来ル　二〇〇〇頃前進ヲ起ス

南京城ノ火災ヲ遠望シツツ城壁近ク進ハ全ク火ノ街ノ奇觀ナルコト　遠面ニ將ノ悲哀如何ニのし

十二月十二日月曜日　晴

明ケレバ易エル南京城南方ヨリ彼我ノ交戦ハ益ノ激シク日本軍ノ進撃ハ京格別氣合ガ入ツテ来タ　一〇、二五中隊長松島中尉戦死　續イテ酒井上等兵戦死ス　我分隊ハ中隊長殿通夜ノタメ城外某寺ニ残ル　全ク親ヲ失ツタル感アリテ残念ノ至リナリ

十二月十三日火曜日　晴

〇、〇〇五南京城ヲ占領高歳ノ聲ハ四方ニ響ツタ　定メシ中隊長ノ英靈モ聞カシテ喜ベシタコトデアロウ　通夜ヲシタリ夜ハ明ケタ　夜明ニナルヤ萬歳ノ聲ハ益々激ク新聞記者等モドシドシ来込ンデ来タ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

分隊全部ノ散髪ヲ行ヒ休養一八〇〇中隊全員ニテ中隊長殿外一名ノ見舞ヲ行フ
後デ小隊ハ聯隊本部護衛ナノデ復帰スル

十二月十四日 水曜日 晴

〇九〇〇中隊長殿酒井上等兵ノ遺骨拾ヒニ幹部外数名行ク 近日出発ニイ準備ヲナス
何ダカ中隊長殿ガ戦死サレタノデ淋シイ感ナシ 思ノヤウナ感カシテナラヌ

十二月十五日 木曜日 晴

明カラ無湖ニ向ヒ出発スルノデ準備ヲナス
一九〇〇故中隊長ノ告別式行ハセラル
二二〇〇軍旗小隊ヲ第十中隊ト交代シ出発
ノ為宿舎ニ帰ル明日ハ早ク出発スルト言フ
ノデ急イデ準備ヲナス

十二月十六日 金曜日 晴

南京発〇六〇〇頃宿舎ヲ出テ無湖ニ向ヒ前
進スル道路ハヨイシ少シ〳〵行軍ガ進行ス
ル一六〇〇頃宿舎ニ着ク 敵モ少シヰタケ
レドモ抵抗シ得ズ 敗走セリ

十二月十七日 土曜日 晴

〇八〇〇宿営地出発モウトテモ寒イ手袋ガ
必要ニナツタ今日モ敗敵ガトテモ出ル雲足
シフシ前進地図ノ誤リカ今日ハトテモ遠イ
ノダ二一〇〇頃目的地タル大手村着休宿
爆撃サレタ悲惨ナ街ナリ

十二月十八日 日曜日 曇

今朝ハ風アリテトテモ寒イ
今日ハ愛ラ目的地タル無湖ニ着クト思ヘバ
勇豪白倍行軍スルニモ道路ガトテモ良イノ
デ早イ進行ヲモニ見フ一七〇〇無湖
着食ノ警備ニツク

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十二月十九日 月曜日 晴

警備第一日ダ昨日マデノ疲デユックリト寝タ 四オハ爆撃ニテ破壊セラレテトテモ殺風景ナ所ダ 過去ノ激戦ヲ思ハシム 日本人ノ住家ラシキモノガタクサンアル 窮且其ノ他ヲ集メル 小隊ハ飛行場警備ノタメ一ヒ〇〇無潮溶飛行場ニ向フ一九〇〇着海軍ト協力シテ警備ニ着ク

十二月二十日 火曜日 晴

飛行場デ海軍航空隊ニ一番ナノデトテモ話ガ賑フ 物資モ割合アルノデ何ヨリダ 時々敵機ガ飛来スルノデ油断ナラヌ デモ防空ニ得ナイノデ割合楽ダ 牛ヲ殺シタノデ久方振デ副食物ガ賑合フタ

十二月二十一日 水曜日 晴

彼等ヲ南島爆撃ノ有様ヲ聞キ航空隊ノヨイ所ヲ知リ 航空隊ニナリタイ氣カスル 若イナラナ 惜シイ

十二月二十二日 木曜日 晴

小澤校役場宛ニ信ヲ送ル
朝大霜ガ降リテ寒イ 一日中飛行場ヲ巡リ終ル 随分廣イ所ダ附近ハ何分平和ナ村ダッタラシイ

十二月二十三日 金曜日 曇時々雨

モウ雪デモ降ルヤウナ天候ダ 近イ内ニ降ルダロウ 廣野ノ端ニクリークガアルガ蓮根ガトテモ根カッテテ来ル 蛤貝類モタクサン居ルヤウラシイ

十二月二十四日 土曜日 曇

雪模様ダトテモ寒イ 養鶏場ノ雛ニ見ニ行ク

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

午モ二頭ヤルカラマダ安心ダ　火ヲ吹イテ取巻イテ會話ス

十二月二十五日　日曜日　曇

前衆支隊高木支隊復歸ス　無線連絡ヨリ一五〇〇頃線ル　歩行場備兵畫番ダ

夜ルハダンノ〳〵冷ル

十二月二十六日　月曜日　晴

正午歩行場警備ヲ九中隊ト交代ス　無線ニ向ヒ前進ス　物資多キ為糧道ニ困ル　一六〇〇密令ニ著梯捨テナンテ入ル　明日カラ蹴飛ばす　中々忙シイ　ニテ係ハ寒イ所ダガ揚子江ガ一目ニ見エル　雪ヨリヨイ所ダ

十二月二十七日　火曜日　曇

年ノ瀬モ近マツタガ我々ニハ何ノ感動モシナイ　一一〇〇小谷ニテ魯港鎮附近ノ討伐ニ行ク　一五〇〇小口ニテ友軍戦車ノ下ニ魯港鎮ニ至ル　揚子江沿岸ヨリハ敵遠射ノ掩護アリ　一八〇〇前進我カ分隊ハ衛生隊ノ掩護アリ　途中ハ高地ヲ占領待機ス　トテモ寒イ日ナリ　明日頃ハ雪ガ降ルカモ知レナイ

十二月二十八日　水曜日　雨

雨ニ乗ジテトテモ寒イ　本隊ノ進路ナノデ進捗ガ容易ナラズ　〇六〇〇魯港鎮北方ニ〇〇ノ地ニ来ル　折カラ雨激シク降リ出シ道路ハ泥濘ナリ一三〇〇目的地ヲ占領　一線部隊ハ前面ノ敵ヲ撃破シツツ前進　雪トナリ第四中隊ハ山ヒマデ引上警備ス　雪ハ益ヽ積ル　一八〇〇小口着駐屯ス

十二月二十九日　木曜日　晴

山口警備隊報告ヲ作ル　下士哨ヲ他夜間ニ入ル二警戒食ヲ堅シ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十二月三十日 金曜日 曇

道ガトラモ悪クテ困ル一日中火ヲ焚イテ暖ス

十二月三十一日 土曜日 曇

愈々思ヒ出ノ昭和十二年モ今日限ダ

多事多難ナカリシコトヨ 明日ハ陣地ノ元旦ヲ迎エネバナラヌ 御旦ノ事ハ如何ニシテ年ノ荒波ヲ乗切ルダロウカ 思ヒマヒトシテモ矢張リ淋シデ来ル 皇国ノ為メ奮斗スル我ガ身ニ妻子アレバコソ新ノ如キ思ヒガスルノダ 一路ハ高地下士哨ヲ上番ニ際ノ年ノ瀬ヲ警備第一線デ送ル

何ダカ肩収ブ気ガ最早内地ノ除夜ノ鐘ガ鳴ル頃ト耳ヲ清マス 次ヲ取巻イテ賑ヤカト語ル

昭和十三年度ヨリ第二ノ道場ダ

意気盛ンニトレテ十二年度ヲ送リ市興ス

蕪湖隊 微塵の想い出

歩一三 五所 軍曹 倉本信

昭和十三年十二月十八日より我等の部隊は蕪湖に警備につきました

警備に着いた当時は物資も乏しく山わりもしたので今までの栄養不良を取り返して皆ぐんぐん肥えるのが目立つ様でした

でも部隊が多いのでなかなか物資も思う様に行かず

といつた海軍経理官殿が出来て徴発をしかし新に来たのだ 中尉東殿が新任を得て連隊長以下五名蕪湖東南方一〇K附近に陣を構へ徴発に出掛けました

部落は少し徴発しましたが中隊長の大物なる豚が沢山いるので宿舎に帰るのは遅く全くひるどりまで帰る。夫の部落迄行つて見ても

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

たが見當りません。指揮者の漁夫に尋ねた所向こうの部落に行って聞いて見ようと言うので自分も探しに行ってみました。

その部落に行って見ると大きな豚が数頭ありましたので大喜びです。早速殺して見ると思いもよりも大きくて擔いで歸るのに心配です。

苦労を擔いましたが豚でも擔いでいる者は年寄りでも若者ばかりです。しかたなく皆で交代しつつ擔いで歸ることとし、やっと河岸まで来て見ると向う遠の渡り時使用した船がありません。

日暮になるし附近には蟹或は泳ぎ出さねばならない。のでしかたなく豚どころではありません。どうしようかと皆顔を見合せております。

夫であったら安全の心配もなく泳いで渡ります。

ますます其の日は幸にして雨が降ってもおりますぐずぐずしている中に日は暮れてしまいました。

仕方なく豚は明日取りに来る事にして皆泳ぎの中に入れて皆泳いで渡る事になりました。

探しに行った豚を川の中に入って見たが痛くて仕方ありません。

一度入ったらどうしても泳ぎたいと言って又仕方なしにしてみます。

向向と言っても此の河を泳いで渡り度ければ無理に帰れません。

仕方なく私が思い切って自分に付けていた物を皆両手で差上げて背水で泳ぎ渡りますがやっぱりつき取って眼を付けて向を見て見ると今迄外の者に仕事をしてかまう。

私命位私のを皆思わっそんでいせうとうくく。

寒いのを心掛けて渡りました。

其の時の寒さ寒に耐え難きです。

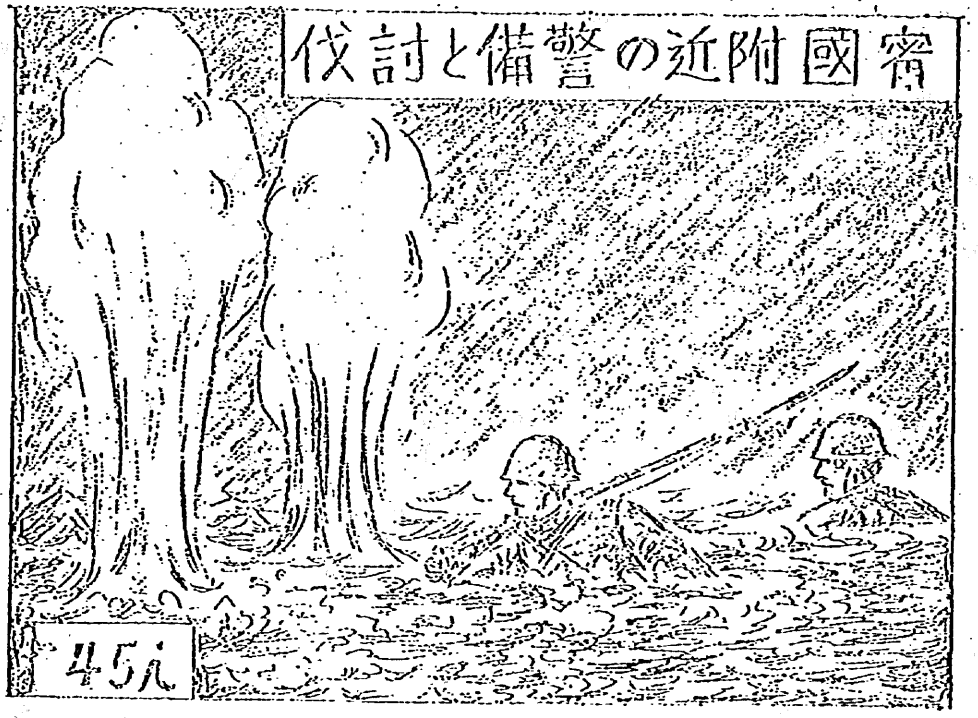
今思い出しても身の毛が立つ思です。

中隊に帰った時は二時。

その時迄待っていた所が人事係中神維新殿がいどく叱られました。

然し翌日は小隊長殿の指揮の下に昨日の豚を取りに行きましたが其の日の豚は格別美味しかったです。

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



目次

大平府回顧　歩四五ノ五所　歩上　宮田敏雄
エンピの手紙　歩四五ノ一〇　白坂上等兵
水東鎮討伐と　歩四五ノ十一　歩准尉　濱田友太郎
牙山嶺間の激斗
水中で炸烈した手榴弾　歩四五　五一〇　歩軍曹　野平秋一
夜間敵虎口を脱出　歩四五　五所　相　徒隆
戦友を困らせた煙弾　歩四五ノ十　坂口軍曹
兵器愛護心に感激　歩四五ノ八　辺津賀中尉
小隊長殿を亡くした　歩四五ノ七　山岩坪軍曹
孫家舗討伐　無類の香水　歩四五ノ二　時吉上等兵
我等の田中軍吉隊長殿　歩四五ノ十二　川野富男

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp